

～2012年3回目となる、患者団体向けインフォメーション・セッションを開催～

＜前回の大阪開催に続いて、

英国の医療制度や国営の保健制度とその試みから次のアプローチ方法のあり方を学ぶ＞

日本の患者団体の「ワクチンラグ」「ドラッグラグ」解消に向けた活動事例をベースに、医療政策への患者一般参画の必要性・合意形成の進め方を活発に議論

・・・前回に続き、Web会議システムを活用し、大阪会場とも繋ぐ・・・

日時:2012年12月3日(月曜日)

場所:東京メイン会場:TKP 東京都駅八重洲カンファレンスセンター 1階「1A」

PhRMAは、日本の患者の方々への支援活動の一環として、去る2012年12月3日(月)、関東近郊の患者団体の代表者の方々等を対象に、「英国医療における患者一般参画の実際」をテーマとする、本年第3回目となる「インフォメーション・セッション」を開催しました。

前回(本年9月開催)大阪において開催されセッションでご講演をお願いした、独立行政法人国立成育医療研究センターの森臨太郎先生による講演内容が好評であったことから、再度、同様のテーマで森先生をお招きし、患者一般参画や医療経済評価のあり方についてご講演いただき、また更には“どのように合意形成を進めるべきか”なども踏まえて、お話しいただきました。

また、今回は、4つの患者団体の代表者より、これまで取り組んできた医療政策の改善を目指す活動事例を紹介し、その事例に対する森先生からの政策提言のあり方などに関する助言や、患者団体間での意見交換など、前回以上に活発な議論が展開されました。

各患者団体からの活動事例発表の基づくディスカッションでは、HOPE★プロジェクトの桜井なおみ氏にファシリテーターを務めていただき、様々な疾病領域で起こる「ドラッグラグ」やその制度と不公平感、またそれを解消するための、システム自体の見直しなどについて議論が繰り広げられました。

もう一つの「ワクチン・ラグ」に関しては、疫学的なデータ(疾患の対象人数や薬価など)について議論され、NICE(National Institute for Health and Clinical Excellence:英国国立医療技術評価機構。イギリスの国民保健サービスの一つ)のシステムを参考に、日本でも個々の患者や患者団体が積極的に医療政策確立のプロセスに参画し、今後、領域を超え活動を共にしていくべきでは、との提言に賛同が得られるなど、とても前向きで盛んなディスカッションが進められました。

なお、前回に引き続き、今回も東京のメイン会場と大阪のサブ会場とをインターネットならびに電話回線で繋ぎ、関西周辺在住の患者団体の方々にも、講師への質問とその回答をリアルタイムで共有してもらいました。

また東京・大阪の両会場とも、ディスカッションの後に、普段はあまり顔を合わせることがない、疾病領域が異なる患者団体同士の交流の場として“ネットワーキング”の時間を設け、自由にコミュニケーション・情報交換を行ってもらいました。

今回は東京・大阪を合わせて、27団体35名の患者団体の方々に参加。「国の政策決定に患者会が“どう関わって行くべきか”を自分の会にでも再検討したい」「行動をしていくことが大事であると実感した」「欧米と日本との格差というもの、インターナショナルでの動きがとても勉強になった」などの声が聴かれた他、「疾患横断の患者団体の集まりで共通点を探ることからはじめる」、「どう患者会が協同したら効果があるか」など、具体的なアクションを起こすために、どのように進めて行くべきかという積極的なコメントが多く見られました。

<セッション風景>

東京会場

講演風景



森臨太郎氏



患者団体活動事例紹介

眞島喜幸氏



村上紀子氏



高畑紀一氏



中井まり氏



ディスカッション風景



大阪会場風景

